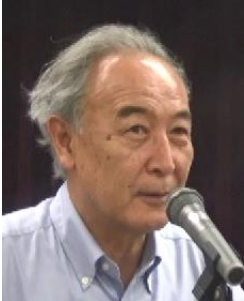


6月10日「止めよう核燃料サイクル政策」関西集会

【講演】渡辺謙一

「日本のプルトニウム利用：核・原子力と人間」



スライドはぼくが2014年の春と秋に取材をして、2015年にフランスとドイツ、ヨーロッパ、アメリカでも公開した作品です。日本で本当に観ていただきたく、来年でも再来年も、映画として持って

きたいなと思っています。

2分間だけなんですけど、日本人がひとり出てきて、（日本人とは小出裕章さん）「日本というこの国が核武装をしたいと思っている限りは、あきらめないとはいいますが、でも（再処理を）本格的にやれば、日本の原子力はどんどん窮地に落ち込んでいくということになります」と小出さんは話している。

3つあります。ハンフォードというのは、マンハッタン計画という、原爆をつくる計画の一部。州に3箇所あったんですが、ロスアラモスとハンフォードとオークリッジという3箇所の絶対的な秘密基地（都市）のひとつで、プルトニウムを生産する役割を担った場所です。

2番目が、冷戦時代を支えた住民は、同時に犠牲者でもある。住民のほとんどが工場の労働者。もともと何もないところに巨大な工場を建てたという事情がありますので、住民のほとんどはここで働くために住み着いた人々、あるいは強制的に来ざるをえなかった人々。その人たちが、初期の工業化において、当然被曝をします。

最後に、ハンフォードは、1987年～88年に完全に閉鎖すると決めた。それからもう30年近く経つわけですけど、実はぜんぜん過去の遺物ではなくて、これは現在形で、いまも1万人近くの労働者が「廃炉」「除染」に関わっています。その実態をお話することによって、プルトニウム生

産工場、言い方を変えると再処理工場、これがどんな負の遺産を残すか、わかるかと思います。

現在まで、ひとつの仕事を終えて、40年も経っても、まだ、現在、除染・廃炉に当たっている人たちが、どんどんやはり被曝をしているということです。それはその当時住んでいた人たちも、今現在、そこのお掃除に当たっている人たちも、同じように、ほんとに健康被害、負の健康被害が明らかになってますけど、細かくはいえないので、その人たちは5万人くらいの集落というか小さなコミュニティですから、ものを言うとどうしてもページされていくので、シアトルに被害者団体、この人は弁護士でカーペンターという人ですけど、この人が現在の被曝労働者のアドバイザー役というか、保護者的な存在で、彼のところにいろんなデータが集まっています。

結局、今も昔も、原子力というのは犠牲者なしに成り立たないし、しゃべることでページされるというか、典型的な、、、このグラフィックの通り、と思いますけど。



フランス ラ・アーグ

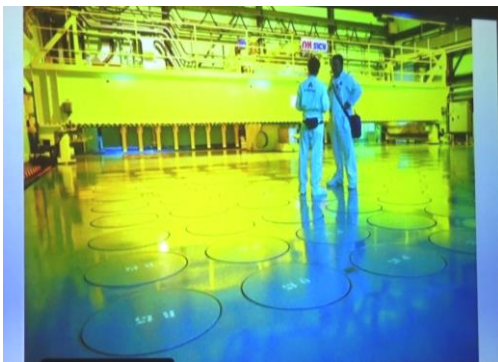
フランスは実は、アメリカで見てきたものが、フランスで起こりつつあるということが、フランスに関していいたいことです。再処理工場が生まれると、どうしてもそっちに流れる。まず膨大な

廃棄物の処理に困る。廃棄物の処理も、どうしても長期的な視野を持つてできなかった。

ラアーグの再処理工場というのは、1966年の稼働ですから、ハンフォードが軍事基地として軍の管理下で原爆をつくるというはっきりした目的で行われたとすると、フランスはそれをプルトニウムを燃料に使うという、この微妙な違いというか、プルトニウムという物質を、爆発物としてみるか、いや、これは使えるという風に、我々が利用すべきものを見て、それを商業化したのがフランスなんです。

フランスは核燃料サイクルという言葉は独自に使ったわけです。当然、フランスの核燃料サイクルの中心であるラアーグというところでは、現在、もう汚染が始まっています。

要は、なぜラアーグに大きな再処理工場を作ったかという、フランスはウランの採掘鉱を持っているんですけど、ウランが枯渇するという恐怖感があって、それで再処理をすることで、プルトニウムを再生産して、再利用するという考え方をもっていたのが、このスーパーフェニックスという高速増殖炉を動かすために、再処理工場ラアーグを立ち上げたのです。ハンフォードで見た高濃度の廃棄物、これがこういう形で、ガラス固化をして保管されているんですが（下図）、ここが満杯で、保管場所がなくなったので、1991年に発送して、約30年計画で、フィンランドのオンカロと同じ形式ですが、地層処分をするために500mの地下に1500mの坑道が今までできていて、これもまだ実験という段階で、来月議会で推進するかどうか、議論されます。



最後の六ヶ所。もうすぐ村長選挙が始まりますね。いろんな意味で六ヶ所にはこれから注目がいくと思いますけれど、（今日は時間がなくて）結論しか言えないんですが、原燃とか原子力ロビーの人たちは、できないってわかっているんだから、メンツを捨てるということ 勇気をもって再処理はできないというべきで、もうそういう段階だと思います。かれら自身そう思っているはずで

それから大間原発と東通原発、むつ中間貯蔵施設を、ハンフォードやラアーグと同じように、一体として 六ヶ所再処理工場だけを単体で突っつくより、大間なんてとんでもない場所に ありますので、公海、津軽海峡は公海ですので、それこそ外国の軍隊が攻めてきても いい標的になると思います。

それからアストリッドはいま詳しく話せないんですけど、さきほど簡単に触れたように、もう芽はないんですね。だからフランスのおつきあいで、日本が金だけを出さされる状況に陥ります。

そして、原子力ロビーは中国への対抗意識を非常に持っているはずで、中国が日本の25倍の国土を持ち、アメリカが25倍の国土をもち、ロシアが50倍の国土を持って、原子力開発をやるのは、中国は日本に10倍の人口を抱えて当然だとぼくは思うけど、それと罅迫り合いをしてまで、原子力開発をする理由は、どこにもなくて、日本という、この狭い国土の、山国の、自然豊かな土地で原子力以外に、自分たち独自のイニシアチブで、独自の方向があるはずなんです。この変な中国への対抗意識を、まず捨てれば、原子力のこだわりは半減すると思います。いまの安倍政権と原子力ロビーは、中国への対抗意識で原子力をやめられないと絶対に思っていますので、このある種の国防意識みたいなもの、小出さんの言う「核武装をやめようと思わない限り原子力は続ける」という意識を、ぼくは今後のテーマにするつもりですが、これを別角度から突いていくべきだと思っています。

（文責：加堂）